
約束した日

杉岡丘波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束した日

【コード】

N2080K

【作者名】

杉岡丘波

【あらすじ】

墓参りから始まった新しい道。そこでした約束。約束を護れるのか。

(前書き)

はい。無限のフロンティア発売記念にロボット物のオリジナル小説を書いてみた。

うん最後適当になったかも

「ふー終わった終わったー勉強なんてしんどいだけだなー」
俺は神じん空也くくちや。どこにでもいる男子高校生だ。どこも秀でたこと
もない男子。

美形でもなく不細工でもなく中肉中背の男だ。平凡こそ我が人生
「おーい空也ーカラオケいかね？」

友人が俺を呼んでる。カラオケかーいいなー。でもなー。

「すまん今日はちよつと用事があるから」

「彼女かー？ 妬んで祝つてやるぞ！」

いや祝うなよ。呪つてくれよ。俺はお前が彼女作つたら呪うから。
「秋元ー彼女作つていたらお前に脱 童貞あきもとじゆうぢについて語ってるさ」

こいつは秋元修二あきもとしゅうじ俺とバカやっているやつの一人。一年の学園祭
の時にパンチラ写真を売っていた猛者だ。ちなみに売り上げは37
万だったはず。まあただのバカだ。

「空也君は彼女作っていたらきつと僕たちに教えて攻略法を聞きに
くるはずだから彼女じゃないはずだよ」

「吉雄……… どんだけ俺をチキンだと思つている」

こっちは斉藤さいとう吉雄よしお。こっちも俺とバカやっている。見た目だけな
らインテリ美形男子なんだけだな。

「うなぎを触つた瞬間逃げ出す程度のチキン具合かな」

「否定できないからきつい………」

「まじかよ空也！」

「黙秘権を発動する」

「まあ秋元君今日は勘弁しよ。今日は妹さんと母親さんの命日なん
だから」

「あ、そういえばそうだった。空也すまん」

「いやいいよ。俺は平気だし慣れたからな」

そう俺の母親と妹はもういない。父さんとの二人暮しだ。父さん

は海外で仕事しているのでほぼ一人暮らしと言ってもいいが。

「まあ今日も空也君の家にいくからね」

「ふはは、新作のエロゲーの話でもしながら飲もうじゃないか」

「俺は熱く語れるほどの知識無いんだけどな」

「そこは気にしない方向ですよ」

一人暮らしだから俺の家にあがりやすい学校も近いためもあって二人はよく来て泊まっっていく。

嫌ではない。孤独を感じなくてもいいからだ。さすがに一人はさびしいものもあるからだ。

「今は3時30分か墓地に行つて帰つてくるのは…5時くらいかな」

「よしならカラオケに行くのやめて6時に空也の家に行くか」

「なら妹カーニバルでももつていこうかな」

「俺の妹の命日に妹モノのエロゲーもつてくんよ……」

「こんなときだからこそ妹補給だ！ 空也君！」

「あーはいはい！。んじゃまた後でな」

「母さん……裕佳……俺は元気でやってるから……友達ともバカ騒ぎして楽しんでる。だから安心してくれ」

墓に花と線香とお菓子を丁寧に置く。

母さんと裕佳がいなくなったのは12年前の旅行の時だった。死んでいるか、いないかは分からない。

俺はそのとき、風邪でホテルで寝込んでいたから詳しくはわからなかった。

父さんが戻ってきたのがかなり遅い時間で部屋に入ったらすぐに泣いてお前は絶対に放さないと言ったことは覚えている。

結局死んだかどうかはわからなかった。でも12年だ。母さんはしっかり者だしサバイバルにも慣れている。そんな母さんが12年も音信不通なのは殆どないと思う。

だから母さんたちが戻つてこない理由は死んだこと以外では考えられない。

一番最後まで生きていると信じていたのに墓を親につくるように言われて父さんは辛かっただろう。

父さんの親は母さんを嫌っていた。そして父さんは生きていると信じているから墓に行つて死んだと認めたくない。

必然的に俺と母さんの両親と友人しかここに来ること人がいない。それが少し悲しかった。

気づいたら結構時間が経っていた。いい加減に戻らないと……

「……（ジー）」

気づいたら俺の隣に少女がいた。その子はひたすら俺が持つてきたお菓子を覗いていた。

背は俺の頭ひとつと半分ぐらい小さい。

髪は白く背中ぐらい伸ばしている。その白銀のような髪は絹を連想させた。

髪に負けず肌も雪のように白かった。俺が近くにしていると穢れてしまつような錯覚を覚えさせるほど綺麗な純白の肌だ。

しかし瞳は血のような鮮やかな赤だった。その瞳がこの容姿に組み合わさるととても人間には思えないかった。

天使か悪魔に見える。どちらかといえば悪魔かもしれない。そんな女の子がつぶらな瞳でお菓子を覗いている。

「……お菓子食べる？」

「……（こくこく）」

パツと顔が明るくなり俺がお菓子をくれるのを待っている。まるで犬のように見えてしまう……

俺は包みをとリドラ焼きを彼女に渡した

「はい」

「……（もきゅもきゅ）」

少しずつ食べていく。なんか可愛いな……って危ない危ない。俺はロリコンか！ いやこのぐらいじゃロリコンじゃないだろう。うん。

「……ありが……と」

「きーにするな」

少し恥ずかしがりながら俺に礼を言う。あーあ母さんと妹のお菓子子が……

まあいつか。この笑顔が見ただけでも収穫だと思っし、母さんも妹もこの子に食べさせるだろうしな。

「お兄ちゃんの名前……なんていうの……？」

「あ、俺は神空也だ」

「じん……くう……や？ 空也お兄ちゃん……？」

「そうそう、いい子だね。君の名前は？」

「アリア・マカリオス……」

外国人かー。まあそうだろうなー白い肌ならアルビノ体質なのかもしれないけど、この瞳は確実に日本人じゃないよな。

「君？ 外国から来たの？」

「が……い……こく？」

あれ？ 日本人じゃなくてもこれだけ日本語喋れるなら外国って言葉も知っていると買ったんだけどな。

「アリアちゃんどこからきたの？」

「あそこから……」

「あそこって？」

指差してるけどいまいち分からない。どこだろうか……

「ハマルトロース研究所……」

ハマルトロース研究所？ ああ、最近治安維持部隊の機体を作っている今最もホットな会社じゃないか

「つてえええ！！ あ、アリアちゃんが職員！？」

「……（ふるふる）」

どうやら違うらしい。ふうよかった……もしこんな子が科学者なら正気失うところだったよ。

「どうしてそこにいるんだ？」

「うーちゃんが……拾ってくれたの……」

うーちゃんって。まるで友達みたいな呼び方だな。

「そうか……怖いことされていないか？」

「うん……うーちゃんは暖かいの……お兄ちゃんも暖かい」

だろうなうーちゃんとか言っている時点で仲がよいだろうと思う。
それより

「俺も暖かい？」

俺って暖かいのか……

「うん……とつても、やさしい日差し……なの……」

「そうか……俺は酷いやツかもしれないぞ？ たえばほら雨雲か
もしれないぞ」

「空もお兄ちゃんは……雨雲じゃない……」

「そうか……嬉しいな」

幼い子は人の善悪に敏感とかいうからな……

けど俺って自分では根で結構悪人だと思っていたんだけどな……
すこしガツクリしたけど同時にほっとした。

「そうだ約束しよう。もし辛いことがあったりしたら俺が相談に乗
って一緒に解決できるようにするから」

「うん！」

満面の笑みで俺に返事をしてくれたアリアちゃん。その顔が嬉し
かった。

「……(びくっ)」

「どうしたんだ？」

さっきまでの明るい顔とは異なり急に脅えた顔になった。何があ
ったんだ？

「こんなところにいたのかM・19315迎えに来たよ」

アリアちゃんは俺の制服の裾を力の限りつかんでいる。

「君は？ まあいいや。その子返してくれないかな？」

「お前は誰だ？」

男はビックリしたように俺を見た。

「へー僕のこと知らない人がいたんだ……。なら自己紹介しようか
な。藤柴義明^{ふじしばよしあき}。肩書きは機神解析部門副所長^{きじんかいせき}です。あ、今は所長か」

「機神って……なんだよ……」

「あ、これって一般人に秘匿だったんだ。そりゃ知らないわけだね。あはは」

「アリアちゃんはさっきからふるふると震えている。こんなに震えているんだ後ろを見なくても分かる。本当にこの人物に脅えているのが。」

「さてその子返してくれないかな？」

「嫌だといったら？」

「僕聞きわけがよくない子供って大嫌いなんだ。素直に渡してくれたら命をとらないよ」

「命なんてくれてやるよ。そもそも悪役がそんなこと言っても説得力がないぜ。どうせ機密やらなんだで口止めに殺したり監禁するんだろ？ それなら守ったほうが少しは得するんでね」

「空也……おにい……ちゃん？」

「僕に齒向かうの？」

「ああ、齒向かうさ。俺は約束したからな。辛いことがあったら俺が相談に乗ってあげて一緒に解決するってね。ついさっきした約束だ。こんなに早く約束を破ったらさすがに男としては恥だからな」

「本当に苛々するね。君。僕の邪魔はしないでくれないか？」

「そついうと銃を取り出す。おいおい……早速反則気味なものきたよ。」

「君が素直に渡してくれたら死にはしなかったのに……」

「ま……って……」

俺の前にアリアちゃんが立った。俺より身長が小さいのに懸命に体を広げて俺を庇っていた。

「なんだい？ M-19315」

「わ……たしがもどるから……このひ……とは……」

「M-19315に錯乱されてしまったら困るからな。まあ仕方ない。ちゃんともどってくるんだよ？」

「わかり……まし……た」

そついい。藤柴という奴の後ろを歩き始める。

どうして……どうして……俺なんか庇うんだよ……

「アリアちゃん！ どうして……俺なんか庇ったんだ！」

俯きながら、口をひらく……

「いきいてほしいの……わたしより……きつと幸せになれると思
うから……」

「ア、アリアちゃん……」

「よかったね。M - 19315のおかげで死なずに済んだのだから
でもそろそろ五月蠅くなつたからね。だまっていってくれないか？」

その後俺はただ泣くことしかできなかった。約束を守れなかった
自分の無力さに。

そのあとどれくらい時間が経つたのだろう。空は茜色になり
俺の影が長く伸びている。

影はまるで俺を嘲笑っているように感じる。無力はきつと罪なん
だ……。

気がついたら俺は墓地の裏の山にある井戸の前まで来ていた。

光が届かないほど暗く深い闇がそこにあった。この中に入ればき
つと俺は楽になれるのだろう。

(いいのか?)

いいんだ。俺はどうせ無力だ。何も守れはしない。

(無力が罪なのか? その前に本当に無力なのか?)
なにが言いたいんだ。

(無力の人間はいない。人それぞれ力がある)

嘘だ。所詮同じだ。

(力の性質が似ているだけだ。同じなんて言葉は本来存在すべき言
葉じゃない)

おまえは何で俺を止めようとする。

(力があるのに約束を守らないからだ)

俺は無力だ。本当は約束なんて結ぶべきじゃなかった。

(無力というのは聞き飽きた。本当はどうしたいのだ)
本当は？

(助けたいのか、助けたくないのか)
助けたい……助けたいさ！ 約束を守りたい。それでアリアちゃんを笑顔にしたい！

(その言葉が聞きたかったのだ。我が汝のために約束を護り導くための力となるう)

それってどういうことだ？ おい！ 反応がなくなったのか？
近くに何かがあるような感じがした。俺はその何かがあるところに向かった。

「な、なんだこれは……」
たどり着いた先にはロボットがあつた。見た感じはロボットだ。いや普通にロボットだ。

んーこれは……スタロウス研究所にある機体で公式発表されている軍専用モデルとところどころパーツが一緒だが大型のランチャーユニットが装備されている特別製か？

新型機なんだろう。装甲は少し薄そうだがかなり機動性は高そう
だ。

武装だけ見ると高エネルギーの遠距離砲撃型か？ でもあんまり合っていないと思うんだけどな。装甲が厚くエネルギーパックとかをたくさん積める機体のほうが効率がいいと思うんだが……

ちなみに俺は射程が極端に低いナイフ系の武装を高機動力の機体で使つて戦ってるのが好きだなー。まあ撃墜率は高くなるだろうけど……

って何考えてるんだよ。そんなこと考えている場合じゃないって
ーの。

ここはどこなんだろうか……墓地の裏の山だとは分かるのだがどこなのかまったく分からない。

少し歩いたところに下を見渡せれるところがあつた。これは幸い

だ。うん。

しかし、俺はこの下の光景に驚いた。

軍らしき人達のが市民を変な柱に入れているのだ。どんどん入っていく。そして逃げたものは……撃たれてしまっている。

歩兵だけなら何とかなるかもしれないが向こうにはハマルトーロス研究所製作の機体を柱のルートに数体配置している。上空にも多数の機体が見えている。

どんどん殺されていく。悲鳴が俺のところまで聞こえる気がした。どうなったんだ……。今までの平和は……無くなったのか……。

(いいの見過ぎしても?)

これはもう俺だけの力じゃどうしようもできない……。ロボット相手にどうやって勝てと言うんだよ。

(あれに乗れ)

あれってあの機体か? どう考えても無理だ。あの武装じゃエネルギーや弾数が持つわけが無い。

(けれど見過ぎすというのか?)

見過ぎすわけがない! そこまで言われたらヤケだ! ヤケになつてやる! 俺の覚悟を見せてやる!

俺はさっきの場所まで戻る。コックピットが開いていた。だれか中に入ったか? いやそれはありえないと思う。それなら音がするはずだ。しかもこれはコックピットに昇りようのケーブルがある。

しかしそれならさっき俺が気づくはずだ。ケーブルが降りてきた。まるで俺を乗せたいかのように。畏かもしれない。けど俺はコックピットに乗り込む。

乗り込むとコックピットの部分が閉まる。さて覚悟を決めよう。

コンピュータが次々と起動し始める。これで動くだろう

「行くぞ!」

カチャカチャ

え! まじで嘘でしょ! 動かないとかそういうオチ!?

「システム起動……パイロット確認……パイロットアンノウン……

名前を申し上げてください」

「神空也……」

「なんだこれは？ 動かすために必要なのか？ さっさと動いてくれ……助けないと……助けないと」

「神空也……データベースに接続中……該当なし。マスターが不在の今あなたを乗せる権限は私にはありません……お引取りください」
「納得できるか！ お願いだ。力を貸してくれ！」

「ナビゲーターの私にはそのような権限はございません。マスターがお嬢様の許可が無い場合は乗せても動かせないようになっております」

「そんな！ 頼む……アリアちゃんとの約束を護りたいんだ。あなたには分からないけど知れない……けど……」

「アリア……ですか。少しその約束について聞かせてください」

「え、あ、うん。墓でアリアっていう少女を見つけたんだ。銀髪で白い肌で赤い瞳の。その女の子が藤柴義明っていう研究所の現所長に連れ去られたんだ。俺は守ると約束したのだが護れなかったけど……まだ間に合うはず……だから……」

「その話本当ですか？」

「本当だ」

ナビゲーターの交信画面から俺を見ている。

「仕方ありません。力を貸しましょう。けれども嘘をついた場合この機体を自爆させていただきます」

「ああ、いいよ」

これで助けられるんだな。

「私はステファノス。この機体のオペレーターを担当しております。パイロットはアリア・マカリオス。今だけ臨時にパイロットチェンジを行います。この穴に自分の血を垂らしてください」

俺は躊躇いもなく近くにあった何かの破片で腕を切りつけ血を垂らす。

さっきまで一部のものしか起動してなかったが今すべてが起動し

ている。これなら……ん？ e p a n g e l i a？ これは……読み方はエパンゲリアか？ どうゆう意味なのか？ まあいいや。「データ更新。武装一新致します」

「どうということだ？」

「この機体はパイロットの血の情報を得てそれによって武装を変えるのです」

「ということは俺好みの武装になるということ？」

「ええ、そうです」

ありがたいがロボットなんて動かしたことが無いので不安だ……大丈夫なのか？

「いまならまだ引き返せますよ……」

「やっぱりお前は向こうの味方か？」

「いいえ、敵対関係です。けど……民間人を危険に晒すのは忍びないので」

「俺は戦うよ。そう決めた。もう逃げるところもないからね」

「覚悟を決めているのなら私は全力でサポートさせていただきます」

「ありがとう」

「では発進します。3……2……1……」

「GOー!!」

「すべてを飲み込め。何もかもを。クフフフ、アハハハ。この地に眠る魔を私は解き放つ。そうすれば私の勝ちだ。私の夢が叶う！

この少女生贖とし、今こそ蘇らせる。アハハハハ！ まずは血と悲鳴で埋め尽くそう。嘆きの歌声と血色をした楽器が奏でる音色が奏でる音楽はそなたに捧げるラプソディーだ。聞いてくれ！」

「い、いや……くうやお兄ちゃん……たすけて……たす……けて……もういや……」

「何もかも遅い……フハハハ」

周りはどんどん黒くなっていく。しかし柱の明るさでまだ夜を感じさせなかった。この宴は終わることは無いのだろう。

男の狂った笑い声しか聞こえない……空もお兄ちゃん……本当は逃げたい……後ろに隠れたかったよ……

「食らえ！」

迎え撃つてくる敵にミサイルをぶちかます。さすがに結構振動がきて慣れない。

「換装終了いたしました」

「武器はなんですか!？」

「近距離は対機神用荷電粒子振動式長剣 カリバーン改 と二刀剣状人工金鋼剣 クロスエッジ、コンバットアーマーブレイカーの三種類。中距離はブレイドチャクラムのみ、遠距離は初期装備のマイクロ・ミサイルです。弾数は6発。ミサイルコンテナは一つ装備しています。ミサイルコンテナの中はマイクロ・ミサイル333発入っています」

「それで十分だ！」

俺はクロスエッジを取り出す。近距離用が大半を占めてる以上近距離武器で攻めたほうがいいだろう。無理に弾切れにする必要もないことだし。

近くにいた敵に急激に接近し敵を斬る。しかしこちらの機動力が相手の動きよりはよい。敵がこちらを撃つ前に行動できる。

「敵、9時方向と2時方向より来ます」

「了解！」

俺はブレイドチャクラムを放つ。中距離ならこっちで撃つほうが斬りにいくより早いためだ。

横に移動し居合い抜きのような要領で2時方向の敵を倒す。

「本当に乗ったの初めてですか?」

「ええ、初めてですよ！」

後ろから来た敵をミサイルで打ち落とす。実はさっきから酔いかけてます。

けどこのパイロットがアリスちゃんなので吐いて汚すのは避けた

いという意志だけで吐きそうなのを我慢している。

「それにしてもよくここまで操作できますね」

「そうですね！」

下からの機関銃マシンガンの攻撃をかわし敵をクロスエッジで斬る。この場所にはもういないみたいだ。

「空也様、柱を壊してください。念のためですけど」

「はい」

ミサイルを撃ちその柱を壊す。壊れたところが人が雪崩のように出てくる。これはとらわれていた人なのか？

「たぶんこれは……早く他の柱も壊しに行きましょう」

「なにかわかったのか？」

「ええ、これはまずいです。これは魔王機復活のための儀式です。

周りはバリアで中心部の柱が復活の祭壇です。この柱のなかに人はいると人の生命力、体内の血を奪い中心に集められます。だから早く壊さないと人が次々死にます！」

「魔王機？ いや後でにする！ 了解だ。しかし残りはどこだ……」

「残りは三本、場所は西、北、南、です。中心が魔王機の育つカプセルだと思ってください」

「なら時計回りで行って最後に真ん中を壊そう」

「たぶんこれは真ん中を最後に壊さないとバリアが壊れないものだと思いますので真ん中を後回しにしています」

「それじゃ行きますか！ あ、でもここの人たちはどうするんですか？」

「この柱は一回壊れたら元に戻らないはずですよ。それに敵もバカじやなければ私たちを倒すために人員をまわすと思うので大丈夫だと思います」

「それなら大丈夫ですね」

北に向かう。さすがに敵が多いと思ったが案外そうでもなかった。敵の機体数は4機しかない。

「拍子抜けですね……」

「しかし安心はしないでください。ここが少ないということは違う地点はもつと多いはずなのですから」

「あ、そうか」

敵の一機がこちらに気づく。俺はスラッシュチャクラムを放つ。そのひとつが敵に食い込んだが他の機体は避けてしまふ。敵はこちらに加速してくる。

俺はクロスエッジを取り出しこちらも加速する。前にいた敵を斬る。後ろの敵が自動小銃ライフルを構えている。俺は腰に装備されているナイフ状のコンバットアーマーブレイカーを相手に投げる。

それは直線に飛び敵に突き刺さる。敵に当たった瞬間電流が走り機体の動きを止める。これは敵を倒す武器ではなくどちらかという
と敵の動きを封じるものらしい。

他の敵が機関銃マシンガンを放とうとしている。

俺は麻痺している機体を盾にする。(中にいる人ごめんさい!)
盾になった機体が弾を受けて爆発する。俺は後ろに下がりミサイルを発射する。そのミサイルは敵に被弾し、爆破させる。その煙は煙幕となり俺の姿を隠す。徐々に煙幕が薄れていく。そのなか敵の姿を発見し俺はブレイドチャクラムを投げる。弧を描き向こうの敵を切り裂く。

「全機破壊確認! 柱を壊してください」

「はい!」

俺は柱をミサイルで壊す。ガラスが割れたときのような音が鳴り、赤い水晶が割れる。そして中から大量の人が出てくる。

俺は西に向かう。やはりさつきより数が多かった。

「やはり数が多いですね。数37です」

俺はミサイルを一気に発射する。一度に撃てるのは最大6発だが自動で再装填されるためある程度連射できる。俺は一気に数を減らした

「敵の数5になりました」

31体はミサイルで倒したらしい。不意打ちが成功するとは思ってもよらなかった。

横から近づいてきたときを回し蹴りを食らわせ敵にぶつける。そこに俺はミサイルを放つ。まとまっていたのでまとめて4体撃破する。

「後ろにも敵兵が！」

後ろに来ていた敵にスラッシュチャクラムを放つ。それと同時に俺は加速し敵に近づく。敵はスラッシュチャクラムを避けたが俺の接近に気がつかなかったないでいたらしく俺に斬られた。

「柱を！」

「了解です！」

俺はミサイルを放つ。ミサイルの爆風により水晶のような柱はまたガラスの割れた音のような音を鳴らせ崩れていった。

「なんか呆気ないですねー」

「本当にあなた初めてロボットに乗ったんですか？」

「ええ、まあ」

南地点に向かっている途中にいきなりそんなことを言われた。

「そんなに上手かったんですか？ 俺って」

「ええ、想像できなかった。ここまで操作に慣れているなんて」

俺は少々恥ずかしかった。親がいないのであんまりほめられることが無かったからだった。

「そついえは機神きしんってなんなのですか？」

「そうですね。後もう少しでつくのでどこまで詳しくいえませんが言いますね。太古の昔創られたのが機神なのですがそれには二つの種類が存在していたのです。最初の機体を神機しんきと魔機まきと呼ばれていました。そのうち神機は四つにそして魔機は七つに分かれました。そしてその4つに分けられた神機は四神機ししんきと呼ばれ魔機は七魔王機しちまおうきとよばれるようになりました。そこからさらに天使機てんしきや魔神機ましんきなどが生まれたのですがここでは割愛します」

「もしかして神話とかの神とか悪魔とかって……」

「もしかしたら機神たちのことを指しているのかもしれないね」

最初の神機がいたのだからそれがヤハウエだとすると四神機はたぶん四大天使にあたるのだろう。そして七魔王機は七つの大罪の悪魔たちをそれぞれ現しているのか……

「あ、そういえば神機と魔機の違いって」

「簡単に説明しますと神機は武装を変える能力を持っているのです。例えていうなら戦闘中に剣を指してそこから銃に変えて零距离射撃みたいなイメージと考えてください。あと血は使いません」

その戦い方少しエグいな……

「魔機は血を使い、周りの環境に働き掛ける事ができます。例えるなら重力を一部だけ掛けたりなど」

神機は武器で魔機は環境を変えるのか……

「そういえばこの機神はどれにはいるのですか？」

これは血を使っているが武器変わるし……

「これは純白の翼の悪魔やら漆黒の翼の天使などといわれています。私は神魔機となすけたいと思います」

「どうして？」

「神と魔が交わりながら神と魔とは違う存在。それなのに神か魔に属するのはおかしい気がしまして」

「それはそうかもしれませんが」

俺は納得した。神とも違う魔とも違うのになぜそれに合わせるのか。合わせる必要なんて無いのだ。

そんなこと考えている間に南地点についた。敵は2機。さすがに大量生産はできなかつたのだろう。あと少しだ。あと少しで救えるんだ。待っていてくれよ！

「ちっ小賢しいな！ 機体も南地点の二機と私の機体しかもうないのが痛いな……けれども一気に西地点の機体を撃破とは……敵は誰なんだ……一騎当千の力だな。しかしあと少し……あと少しだ！」

向こうはサイドステップで軽やかに避け接近をしてくる。俺はコンバットアーマーブレイカーを放つ。

「甘いんだよおおおおお!!」

それを藤柴は右に避けた。

「甘いのはお前だ!!」

ブレイドチャクラムが俺のところに戻ってくる。それが藤柴の機体にあたり腕を切断する。

「なに!?!」

「ちゃんと後ろも見ろよな」

「許さない、許さない!」

藤柴は急に残っている手を天に指す

「空也さん! 下に!」

「え!?!」

俺は翼のブーストを切り下に落ちる。

俺のいたところに竜巻が発生していた。

「あれが魔機的能力です。きっと魔神機です」

「強いのか!?!」

「ええ、魔王機には劣るものの普通の機体とでは圧倒的に強さが違います」

厄介だな。血が必要とことは限りがあるのだからきつとやつは限界まで使っだろう。こっちの勝利条件はなんだった。アリアちゃんを助けることだ。あとあれはアリアちゃんを生贄にしているだろうからアリアちゃんを助ければなんとななるのでは? そうすればなんとか助ける方法だが……機体で向かっても隙をつかれゲームオーバーなら……あの手だな。

「ステファノスさん……操縦できます?」

「一応できますが生身で操縦できませんのですこし反応が鈍くなります」

「時間稼ぎ頼めるか?」

「ええ、それぐらいならなんとかできます」

ならあの手を使おう。失敗したら終わってしまうがこれしかたぶん方法は無い。

「どうしたあああああ！ ガキだから疲れたのかあ！？」

「それじゃ頼む」

「ええ、ハッチオープン！」

俺はコックピットから飛び降りる。水晶の上にどんぴしゃだ！

「アリア大丈夫か！？」

「お、おにい……ちゃん……」

水晶の中に埋もれていた。俺の脚もずんずんと埋もれていく。

俺は一気に潜るように水晶の中に入っていく。アリアの腕をつかもうとしたが少したりない……

「アリアちゃんお願いだ！ 腕を伸ばしてくれ！」

下には逃さないように触手でつかもうとしている魔王機があった。ためえなんかアリアちゃんはやらない絶対にだ！

アリアちゃんも少しずつ腕をのばしている。後もう少しだ！

腕をつかんで俺は急いで上に登る。

触手はなおも追いかけてくるがこちらの速度には追いつかない。

ギリギリのところであつた俺たちは浮き上がる。

「ステファノスさん！ 助けました！」

『今から向かいます！』

下に機体が向かう。俺はそれに飛び込んだ。

ハッチをしめアリアを俺に乗せておく。まあアリアがお姫様抱っ

このような格好で俺にしがみついているから楽なだけだ。

「貴様！ よくも生贄を！」

「生贄じゃない！ アリアちゃんじゃボケ！ あと触手なんてキモ

イんだよ！」

「触手だと……ありがとう。教えてくれてな！」

藤柴は水晶に攻撃し始めた。どういふことだ？

そして水晶が割れる。そこには水晶の中で見た魔王機の姿があつ

た。

「どうして……水晶を壊したら大丈夫なはずなのに……」

「ステファノスさん。こうなったらあれとも戦うしかないですよ」

「そうですね……」

「魔王機としてはまだ不完全だが貴様らを倒すにはまだ余裕だ。しかも武器ももうつきかけているだろう？ クロスエッジは折った。

コンバットアーマーブレイカーも壊した。ブレイドチャクラムも壊した。マイクロミサイルも尽き掛けている。どうやって戦うんだ？」

「どうやらそのようだった。武器はクロスエッジとマイクロ・ミサイルしかない。しかもクロスエッジは片方が壊れておりマイクロ・ミサイルもあと20発しかない。

けれども戦うしかない。助けたんだ。絶対藤柴に負けない。勝つてやるんだ！ あれ……そういえばもう一つ武装があった気が……やっぱリリバーン改があった……。これさえあればまだいける……！」

「それでも俺は戦うさ。まだ無傷な武器だってあるんだしな！」

「なんだと！」

俺はカリバーン改を起動する。白銀の色をした刃が出現する。

「くらえ魔王機！」

俺は魔王機に一閃する。魔王機は苦しんだが倒れなかった。

「火力不足か……」

「まだ……おわってない……！！」

「アリアちゃん!？」

アリアちゃんが起き出しPCのキーボードみたいなものでコマンドをすごい速度で入力している。

「お願い……お兄ちゃん撃って！」

「ああ！ いくぞ！ シュート！」

何が起こったかわからなかったが眩い光があふれ出していた。

なるほど……実際に零距离射撃をするとは思わなかったな……

光が止み目の前の光景が見えるようになった。目の前には魔王機

が存在しなく地面がえぐれていた。

「……ええ!？」

空は藍色だが光を放つ白いもののおかげで綺麗に見えた。けど目の前のクレーターで台無しだった。

「アリアちゃん……これ半端ないよ……」

しかしアリアちゃんは可愛い寝息をしながら俺に抱きついて眠っていた。

「ビックリですね……はぁ空也さん……お嬢様を起こさないであげてくださいね」

「あ、はい」

自動で降りていく。きつとステファノスさんが動かしているんだろう。

俺も眠くなつたな……寝るか……

朝、俺は通学路を全力で走っていた。まさか寝坊するとは……

「おーつす、空也も遅刻かー!」

「勝手に遅刻にすんな! まだ間に合う!」

なんとかギリギリに校門を通り。俺と修二は勝利の味をかみ締めていた。

「あーあ、昨日あんなことあったから休みになってると思ったのに」

「昨日なんかあったか? 修二」

「お前臭いものには蓋するタイプだな……」

「いやあんまりしないが……」

少し違和感をもって教室に入りみんなを見る。すこしみんなやつれているようだ。

すこしたちHRが始まった。

「さて今日から新しい生徒と教師がこのクラスに所属することになった。入ってきたまえ」

「転校生なんて珍しいな」

「おーそうだなあー空也。あーねむ。どうせ美人じゃないだろうし

期待してないよ」

「おまえなあ……」

あきれていると二人が入ってきた。気のせいかな俺の知っている人かもしれない。

うん、気のせいだ。俺はあいつらのこと知らないはずだ。

「さて自己紹介を右から」

「あの子可愛い！」

修二はすぐにおきてまるで食わんとするように見ている。

「まあ可愛いけどな。うん」

「あの人も美人じゃないか。なあ？ 修二君」

「ああ、やっぱりそう思うか！ さすが同士吉雄」

俺の前の席で盛り上がるなよ。どうして……どうして……

「アリアちゃんとステファノスさんがここに」

「あ？ 知ってるのか？」

「いやべつにいい？」

というかステファノスさんって画面の中にいなかったか？ 人じ

やなかったよな……

「え……つと……アリア・マカリオスで……す。よろしく……おね

い……がい……します」

「……よろしくおねがいしまーす……」

おお。すごい人気だな。おい

「席はそうだな。あそこの端がぁいっているんであそこで」

狙ってるのか？ 教師てめえねらってるのか？ 妬みの視線が痛

い……

「今回このクラスの副教師に就任しましたステファノス・セーメイオンと申します。担当教科は外国語です。これからよろしくお願ひします。」

「……よろしくおねがいしまーす……」

あれアリアさんがソワソワしてるなー気のせいだろ。

「それではHRを終わります。一時間目は今日の六時間目のLHR

と交換しているので休み時間に質問しないで一時間目にするように。
では会長」

「きりーつ、礼！」

「……ありがとうございます！」「……」
意外に殺到しなかったな。うん一時間目にあるからいいんだろう。
学校案内だつて帰りにやればいいし。

アリアちゃ アリアさんがぴよこぴよこ歩いて俺の隣の机に座
る。

「あ、お兄ちゃん……」

そして俺に気づき俺にべたべたとくつつく。

妬みの視線を受け一時間目が始まる。

そして質問がくる

「昨日の魔物の襲撃であの機体で戦ったのってアリアちゃんなので
すか！？」

ああ……なんか冷や汗が……

「え……（ふるふる）」

首を振る。よしこれで……

しかし指を俺に向けている。嫌な予感しかない。

「お兄ちゃんが……戦ったの……」

みんなが一気に俺を見る。穴があつたら猛烈に入りたい……

俺の人生たぶんここで変わるんだろうな……

まあいいか。やっぱり蓋をするのはやめておこつ。

向き合つて。ちゃんと約束どおりに護つていこつと思つ。

(後書き)

どうでしたか。最後適当だったでしょう。はつきりいつて途中からめんどくさく(げぶんげぶん)なんでもありません。

さて無限のフロンティアですが。OPに感動した。すごいね！相変わらずMAP移動しよばいけど！よかったよかった。思ったこととはヒロインが遅しかった！そしてアクセルつええええ！！もうフィーバーでしたよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2080k/>

約束した日

2010年10月8日14時56分発行